



「十間坂を望む」 2015年



「坂の続き」 2017年



「Dead End」 2014年



「小樽稲荷神社例大祭」 2017年



「解体」 2015年

Dead End - 「十間坂」 <手宮地区-小樽>

小樽は坂の町であり、その多くの坂道には名前が付けられている。かつて北海道発展の拠点となった手宮地区に「十間坂」と呼ばれる急勾配の坂道がある。

この坂道は、その名のとおりに十間ほどの広い道幅(約18m)を持ち、手宮中心部の商店街の延長上にあり、地元では「荒巻山」と呼ばれる石山の頂上に向かって延びている。

しかしながら、この坂道は、頂上近くで途切れてしまい、ピークとなる岩場はV字型に切り通され、行き止まりとなる。その先の眼下には小樽の中心街が広がっている。

正にこの不可思議な光景が、この歴史深い手宮地区の生活・文化を保ち続けてきた痕跡なのである。

かつてこの十間坂は、明治時代以降、小樽中心街と手宮地区を結ぶ道路計画が幾度となく検討された。しかしながら、そのたびに手宮地区の衰退を危惧する地元商店街や住民の反対により、計画は断念されてきた歴史がある。

結果として、この十間坂のふもとに広がる手宮地区は、小樽の歴史の始まりであり遊郭もあった当時の面影を残し、もち屋や銭湯、庶民的な商店街などが未だひっそりとたたずみ、昔ながらのコミュニティを保ち続けてきた。

しかしながら、こうした歴史・文化を育んできた手宮地区も、近年、住民の高齢化や世代交代による商店の廃業、持ち主不在の廃屋や建物の倒壊が加速化する一方、道外資本のホテル建設が現れるなど、新たな機運が見受けられる。

自分は、こうした坂の現実や過去からの痕跡を探り、その撮影を通して、十間坂の行く末を見守っていきたい。

谷口能隆

4/26(日) 13:00
アーティストトークⅠ
谷口能隆
菅原慶郎
(小樽市総合博物館学芸員)

4/26(日) 14:00
Museum Concert
クラシックギターと朗読
ギター 藤垣秀雄
朗読 斉藤和子

要観覧料
お申し込み・お問い合わせ
市立小樽美術館
0134-34-0035

5/3(日) 14:00
アーティストトークⅡ
谷口能隆
星田七重
(市立小樽美術館学芸員)



谷口能隆
(TANIGUCHI YOSHITAKA)

1958年 岩見沢市に生まれる
1980年 写塾 下高井戸(故 小森孝之氏主宰)塾生
1982年 中央大学経済学部国際経済学科卒業
2016年 フリーランスフォトグラファー
札幌市在住

同時開催

新収蔵品展

【出品作家】上野山清貢・大本 靖・小川洋子
木嶋良治・佐渡富士夫・武石英孝・間宮 勇

北海道内でいち早く「小樽洋画研究所」が設けられ、道展に先んじて公募展「太地社」を開催した小樽に、故郷ゆかりの美術館が求められたのは、ごく自然な流れであったといえるでしょう。

熱心な市民活動の結果開館した市立小樽美術館は、収蔵品の蒐集についても、ご遺族、所蔵家の皆様の尽力により、2700点を超えるコレクションが形成され、近年ますます充実した内容となっています。

このたび新収蔵作品展として、平成30年度に受贈した作品の一部を展覧、ご紹介いたします。



間宮 勇 選炭場風景



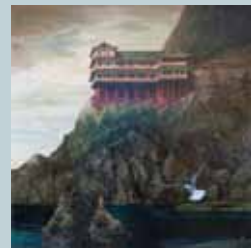
佐渡富士夫 無題2



小川洋子 レクイエム(涙の日)



木嶋良治 氷の海



武石英孝 楼閣

市立小樽美術館
otaru city museum of art

〒047-0031 小樽市色内1-9-5
Tel:0134-34-0035 Fax:0134-32-2388

後援：市立小樽美術館協力会

JR内田線 ●小樽経済センター ●市立小樽美術館 ●郵便局 ●オーセントホテル小樽	小樽駅 ●サンビルスクエア ●旧手宮橋
金融資料館 (旧日本銀行) ●歴史館 ●ニトリ美術館 ●小樽運河	

新収蔵品展/Dead End - 「十間坂」 <手宮地区-小樽> 谷口能隆写真展 2020.3.21(sat) ~ 5.17(sun)

開館時間 9:30~17:00 (最終入館は16:30まで)
休館日 月曜日(5/4を除く)、3/24(火)、4/30(木)、5/7(木)、8(金)、12(火)、13(水)
観覧料 一般300(240)円/高校生・市内高齢者150(120)円/中学生以下無料
※()内は20名以上の団体料金 ※1階中村善策記念ホール「3階一原有徳記念ホール」共通